学校通信
赤坂小だより
令和6年度　第20号　R6.12.6
北九州市立赤坂小学校
校長 大成清徳

☆自由に、自分らしく生きられる社会を目指して☆人権週間の取組

◎12月10日は「国際人権デー」。12月4日から10日までの「人権週間」を中心に、12月は「人権月間」となっています。本校では、2日(月)～6日(金)までを人権週間と位置付け、給食時間に本市が制作している人権啓発のためのラジオ放送『明日への伝言板』を放送しました。

放送した内容

○冗談？それともいじめ？
軽い気持ちでしたことが相手を傷つけてしまうネットの世界。誰かに関する書き込みをする前に、自分に置き換えて考えるようにしたいものですね。

○私自身が体験した部落差別問題
住んでいる土地により不当な差別を受け、結婚できなかった母達の体験から、差別をなくすためには教育が必要であることに気付きます。

○優しさの道も一歩から
車椅子に乗っている祖父がエレベーターに乗ろうとすると迷惑がる人達。「どうぞ」と譲ってくれた大学生から、行動することの大切さを学びました。

○あなたがいてくれるから
学校に行けず悩む6年生。勇気を出して教室に入ると、「おはよう」と自然に声をかけてくれた友達の優しさに、寄り添うことの有難さを感じました。

◎人権週間が始まる2日（月）の給食時間、校長から全校放送で人権週間についてお話をしました。1948年に、国際連合で採択された「世界人権宣言」の中には、次のようなことが書かれています。

「わたしたちはみな、生まれながらにして自由です。ひとりひとりがかけがえのない人間であり、その値打ちも同じです。だからたがいによく考え、助けあわねばなりません。」

「わたしたちはみな、意見の違いや、生まれ、男、女、宗教、人種、ことば、皮膚の色の違いによって差別されるべきではありません。また、どんな国に生きていようと、その権利にかわりはありません。」

これは、先日92歳でこの世を去った詩人の谷川俊太郎さんが、宣言の一節をわかりやすく訳したものです。人権宣言には、誰もが差別を受けることなく、自由に、人間らしく生きていく権利をもっていることが高らかにうたわれています。人権週間は、このことが守られているか、自分たちの周りを見つめ直すために定められたのです。

しかし、残念なことに、世界では、パレスチナとイスラエルの対立や、ロシアによるウクライナへの攻撃が続いていて、罪のない子どもたちまで命の危険にさらされています。

そして、私たちの生きている社会の中にも、人種や性別、様々な障がいや貧困などによる差別は残っています。誰一人差別されない世界を作る第一歩は、私たちの身近なところから、人の心を傷つける言葉や態度をなくすことです。そのことを考える手がかりとして、こんの　としひこさんの詩を紹介します。同じ人間としてお互いを尊重することができれば、自分らしく生きる世界は実現します。ご家族でも、人権について話し合ってみてください。

それがにんげん　　こんの　としひこ

しあわせ　いっぱいに　生きていたい　自分の　のぞむ　しごとに　つきたい
みんなのために　なにかをしたい　あいする人と　むすばれたい
にんげんらしく　くらしたい
こうしたねがいが　かなうこと　こうしたねがいが　じゃまされないこと
それが　にんげん

◆古都の歴史を学ぶ　【４年生】社会科見学：大宰府

◎11月29日（金）、4年生は小雨の中、社会科の学習の一環として、バスで太宰府市へ出かけました。

初めの見学地では、学芸員の田中先生から、九州の政治の中心であり、諸外国への窓口であった大宰府の役割や当時の建造物について、坂本八幡宮で大伴家持が詠んだ歌から「令和」の元号が誕生したことなど、たくさんのお話を伺うことができました。太宰府愛にあふれる田中先生は、なんと社会科の教科書にも登場するほどの専門家だということに、みんな驚いていました。

午後からは、学問の神様として有名な菅原道真公を祀った天満宮の見学です。ここでもガイドさんから、道真公が天満宮の下に埋葬されたことや、牛が座り込んだ場所に建てられたこと、飛梅の言い伝えなど、興味深いお話を聞きました。雨の中、傘を差しながらしっかりメモを取っている4年生の姿に感心しました。

◆伝統芸能を学ぶ　【６年生】能楽体験

◎12月2日（月）、国語科「古典芸能の世界」で狂言「柿山伏」の学習をした6年生は、ゲストティーチャーとして宝生流の杉岡敏秀師範とシテ方の2名の先生をお迎えして、能楽体験学習を行いました。

初めに、ビデオで「羽衣」の舞台を鑑賞し、お話の内容と能楽の歴史を学びました。

次に、小鼓、大鼓、太鼓、能面付けを、グループごとに体験しました。

続いて、全員で能の動きの基本であるすり足での歩行もやってみました。最後に、源平合戦での源義経の活躍を描いた仕舞「八島」の模範演技を披露していただきました。子どもたちは、中国に起源をもつ歴史ある伝統芸能「能楽」を目の前で見て、実際に体験することで、楽しみながら深く学ぶことができました。

◎児童の感想から（一部抜粋）

「大鼓は、たたく前に手を横に伸ばしてから指の先だけじゃなくて、手のひらを角に当ててその反動でたたくことが分かりました。」

「視界の悪い能面をつけながらすり足をするのはむずかしいし、本気で努力した人しかできないことなんだと思いました。自学でしていた増女と般若がでてきたので、自学をしていてよかったなと思いました。」

「先生が、「どんなことでも訓練すればできるようになる」とおっしゃっていたので、たくさんのことにチャレンジしていこうと思いました。」

「人生に一度しかないような体験ができてよかったです。」

ご協力
ありがとうございました

【5年】服のチカラプロジェクト

職員室前に設置した服の回収ボックス

◎「世界各地にいる難民の人たちの命を救おう」と、5年生が全校に呼びかけて、11月8日～12月6日までの1か月間、ご家庭で余剰となっている衣服の回収を行いました。

『服のチカラプロジェクト』とは、衣料品販売のユニクロやジーユーで知られるファーストリテイリング社が UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）と連携して、小中学生を対象に行っている参加型学習です。本校では、7月に出前授業で服の再利用について学んだ5年生が、着るものがなく不自由な暮らしをしている難民の人たちのために、自分たちでポスターを作り、放送やお手紙で協力の依頼をしてきました。子どもたちは、毎朝、たくさんの服を袋に詰めて学校まで持ってきてくれました。皆様のご協力のおかげで、きれいに洗濯された服がたくさん集まりました。来週、5年生が手分けをして服の仕分けを行い、ユニクロ折尾店に引き取っていただきます。皆様の温かい心遣いが、難民の人たちの心と体を包んでくれることを願っています。